

錢司の獅子舞・田楽・相撲(記録)

錢司宮座行事保存会
相楽郡加茂町大字錢司

錢司の氏神春日神社の祭礼(十月十七日)に行われる芸能で、獅子・踊子・相撲から成る。宮座の制(東座、西座)によって伝えられるもので、五人の年寄と当人及び次年度当人が主となつてとり行われる。獅子は、当人が打つ締太鼓の拍子に合わせて舞う二人立ちの獅子舞で、踊子のチヨキ役のうち二人が舞手を勤める。踊子は、締太鼓一人、鼓一人、チヨキ(ピンザサラ)四人の編成で行われる田楽舞で、締太鼓を先頭に鼓―チヨキの順に一列になり、樂器を打ちつつ踊り巡る。いまチヨキは四人となつてゐるが、これは東座の中絶によるもので、

獅子舞

本来は東・西両座から四人ずつ八人出るものであり、十七才で座入りすることになつてゐる座衆のうち末席の者各四人がこの役に当るならわしであつた。同様の事情で、相撲も本来の形態を失ひ、鉦を持つて立つ当人に向いふんどし姿の相撲取り(次年度当人の役)が太刀の受渡しなどをするばかりであるが、もとは兩座から相撲取り各一人が出、儀礼的な相撲を取るものであつた。

このようにこの祭礼芸能はかなり形態化し、芸能としての価値は低くなつてゐる。しかし、祭礼芸能としてのそのあり方には、王の舞・獅子・田楽を基本構成とする中世的祭祀の様相が窺われ、それを伝承する宮座慣行と合わせ、資料的価値が高く貴重である。

阿須々岐神社の祭礼芸能(記録)

阿須々岐神社祭礼保存会
綾部市金河内、坊口、仁和、内久井町

金河内に鎮座する阿須々岐神社は近在四カ町の氏神で、十月の祭礼(もと十七日、現在は第一日曜)にはさまざまな芸能が行われる。それらは大きく、能と狂言、振物と花の踊及び百射の神事に分けられるが、弓の射手が各町から出る百射のほかは町単位で分担し、その持芸を年輪番制で奉納することになつてゐる。

狂言・御太刀 金河内町
能・花の踊 坊口町
露払・小太刀 仁和町(屋河内)
薙刀 池
小太刀・大太刀 内久井町



田楽



百射の神事

これが、その持芸と当番順で、本年（昭和六十一年）は金河内町が祭当番で、百射の神事のあと社頭に練込み、境内舞堂において狂言と御太刀を演じた。来年は坊口町の当番であるが、これらの祭礼芸能の奉納が年輪番制となったのは大正七年のことで、それ以前はマツリドシと称し、三年めごとに全町が一堂に会して、振物（露払―小太刀―小太刀―御太刀―薙刀―大太刀）、花の踊、狂言、能の順に奉納していた。

金河内ほか三カ町が分け持つ振物は、少青年が二人一組となり、棒や刀・薙刀などを手にし、笛・太鼓のはやしで切組む風流系の芸能である。これに続く花の踊は、いま休止の状態にあるが、花笠をかぶり、笛と軍配を手にしたシンボチ二人が中心となり、太鼓打二人が打つ大太鼓の拍子と歌方の音頭によって踊る風流踊であり、「花の踊」「露の踊」など五曲を伝えた。この振物と花の踊はほんらい一連の芸能であり、セット芸として伝わったものと考えられ、先の振物の次第には年



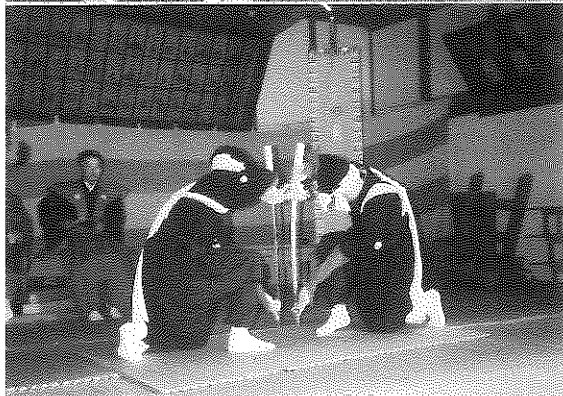
狂言

令階梯的な構成が認められる。

これに対し、能は「難波」、狂言は「御年貢」（松葉）の各一番しか伝えず、能の場合は仕舞形式となっている。しかし、これらもセット芸として伝わり、行われてきたものである。

この多彩な芸能がいつどのようにしてはじまったか、確かなことは知られない。しかし、坊口町には能にかかわるものとして翁その他の面が伝存する。そのうち翁面、父尉面の二面は南北朝時代の古面であり、能、狂言がいまに行われる来由を窺わせる。おそらく能、狂言を主たる芸能とする中世的な祭礼の場に新興の風流芸―振物と花の踊が波及し複合して現在の祭礼芸能が成立したのであろう。

輪番制により、氏子の村々がそれぞれに芸能を分担して氏神の祭礼に奉仕する方式はくずれたが、中世的な祭礼芸能の特色はなおよく残しており、百射の神事に能・狂言・振物・花の踊という芸能構成と合せ、資料的価値の高い伝承であり、貴重である。



御太刀

神崎の扇踊(参録)

湊十二社祭礼行事保存会
舞鶴市字西神崎、東神崎

この扇踊は、東・西神崎の氏神湊十二神社の祭礼(十月十日―もとも十月十七日)に奉納される芸能である。単に「おどり」とも呼ばれるが、シンポチ一人(副二人が付く)、東西一人、太鼓打四人、踊子大勢で行われる。踊子が手にする扇のひらめきが印象的な踊であり、「扇踊」の名の由来をしのばせる。

これらの役のうち、踊子はいま地区の役員二十人が勤めるが、もとは氏子のうち踊れる大人はすべて参加するならわしであった。これに対し、シンポチは上手な者が選ばれて当るならわしで、同一人が引退するまで勤めることになっている。副はその見習いであり、近時は副も踊に参加する。一方、東西

と太鼓打は少年の役とされ、東西は袴に烏帽子姿で口上を述べ、太鼓打は袴がけの長ズユバン姿で太鼓を打つ。太鼓は大型の鉦打太鼓で東・西両地区から二台ずつ都合四台出る。

祭礼は宵宮と本祭から成る。宵宮には青年がオフネ(台車に千石船の大型の模型を載せた船屋台)と太鼓台を曳きまわり、お目出度ごとのあつた家などで手踊をくり返すが、この手踊は大正昭和の青年団活動の活気をほうふつさせる興味ぶかい伝承である。本祭の行事は昼過ぎの宮入りに



はじまる。宮入りは二基の傘鉾を中心に行列を組み神社まで行列するもので、太鼓打の「練込太鼓」、青年の力士行列などが一団となり社頭に練込む。この宮入りに続いて扇踊、相撲の奉納となるが、扇踊は本殿前の庭上に敷かれた二十畳大の上敷を舞台とし、その本殿側に立て並べた大太鼓を打つ太鼓打の拍子とシンポチの音頭で踊られる。奉納曲は「神楽踊」「室町踊」の二曲となっているが、その前に「お庭入り」について「練込太鼓」「東西口上」の次第がある。「東西口上」は踊子の後方に控えていた東西が軍配をかざし踊子のまん中を割るように進み出、本殿に向い口上を述べるものである。なお、最後の相撲はかたわらの特設の土俵で行われるが、取組みの前に少年の行司と力士による土俵入りがあり注目される。

扇踊はこのようにこの祭礼行事の主体をなす伝承である。その由来など確かなことは知られないが、東西の口上に「さ、ばやしの踊りひと踊り……」の一節があつて、丹後に広く流布した笹ばやしの一つであることを示している。大太鼓の芸打ちをともしなう風流踊の特色をよく残す伝承であり貴重である。



史跡・名勝・天然記念物

坊田古墳群

(史跡・指定)
船井郡八木町字柴山小字坊田

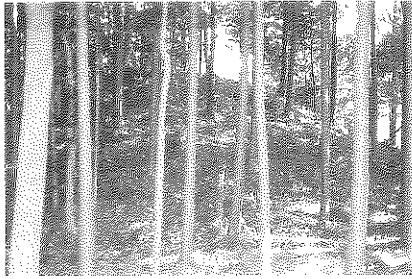
八木町の大堰川西方、町域の西南端の山裾に柴山の集落がある。この集落は、北に開けているほか、三方を山に囲まれており、東南方の城山(標高二三〇m)は、八木城跡(中世、丹波守護代内藤氏ほかの居城)である。

坊田古墳群は、この柴山の集落の南部、山あいの柴山川をはさんで現在五基の古墳が存在する。1号墳が方墳であるほか、他の四基はすべて円墳であり、五基とも内部主体は、横穴式石室である。各々の古墳の規模、内部主体等は別表のとおりである(別表参照)。この中で、5号墳のみは、府立丹波養護学校建設に伴って、昭和五三年七月、九月京都府教育委員会により発掘調査された。その結果、墳丘裾部の積石や形式的な狭い周濠の存在が特徴づけられる。遺物は、馬具、鉄鏃、須恵器杯蓋、高杯などが出土し、七世紀前半ごろの築造と考えられる。他の2、3、4号墳も別表に示した概要や5号墳の調査成果から、同じく七世紀前半ごろの築造と考えるとよく、1号墳はそれらより若干先行するものである。また1号墳は、横穴式石室を有する方墳として、この付近では稀なものであり注目される。

以上のように、この古墳群は、丹波地方南部における後期古墳群の好例として貴重なものであり、5号墳が学校用地内で保存されていることも特筆される。

| 墳形 | 規模 | 内部主体 | 開口方向 | 玄室規模 | 羨道規模 | 備考 |
|-----------|------------------|----------------|------|---------------------------------------|------------------------------|-----------------------------|
| 1号墳 方墳 | 一辺 18m 高さ 4m | 横穴式石室 (両袖式) | 南南東 | 長さ 4.8m 幅 2.3m 高さ 2.0m | 長さ 2.0m 幅 1.3m 高さ 0.7m | |
| 2号墳 円墳 | 径 8m 高さ 2m | 横穴式石室 | 南東 | | | 天井石露出 するのみ |
| 3号墳 円墳 | 径 15m 高さ 4m | 横穴式石室 (片袖式) | 東 | 長さ 3.9m 幅 1.7m 高さ 1.8m | 長さ 3.8m 幅 1.1m 高さ 1.2m | 開口 奥壁一石 天井三石 側壁四段 |
| 4号墳 円墳 | 径 10m 高さ 2m | 横穴式石室 | 南東 | 長さ 3.6m 以上 幅 1.2m 以上 高さ 1.2m 以上 | | 半壊 奥壁、北東 側壁残存 |
| 5号墳 円墳 | 径 16m 高さ 4.5m | 横穴式石室 (両袖式) | 東南東 | 長さ 3.8m 幅 2.2m 高さ 2.4m | 長さ 6.3m 幅 1.4m 高さ 1.9m | 発掘調査 墳丘裾部の 積石 狭い周濠 |

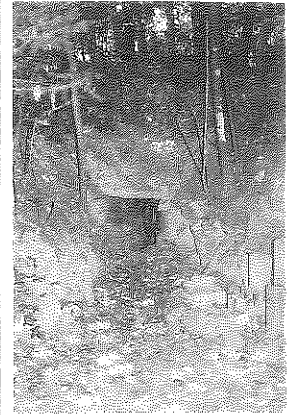
(別表) 坊田古墳群の概要



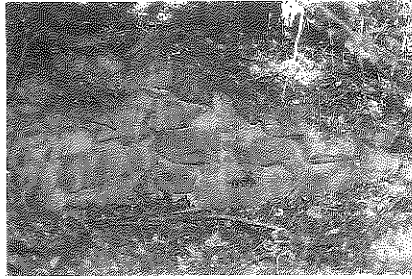
1号墳



2号墳



3号墳



4号墳



5号墳

白米山古墳



与謝郡加悦町字後野小字白米山

(史跡・指定)

野田川は、丹後地方における代表的な河川の一つで、上流は丹後縮緬で知られる加悦、野田川両町を貫流し、岩滝町岩滝で阿蘇海（宮津湾）へと注いでいる。この野田川上流の平野部を加悦谷と称している。加悦谷の東部は、大江山連峰からなだらかに下る舌状の台地が、幾条も張り出しており、台地の先端付近には、数多くの古墳が存在する。

野田川流域で最も有名な古墳は、その東岸の加悦町明石に所在する、国史跡・蛭子山古墳（前方後円墳、全長約一四五m、内部主体・舟形石棺、昭和五年七月八日指定）である。この蛭子山古墳の南約一・六km、同じく野田川東岸の台地先端に位置するのが白米山古墳である。この古墳は、前方部を北に向けた二段築成の前方後円墳で、墳丘全体は、現在も葺石の存在が顕著である。加悦町教育委員会、同志社大学考古学研究会によって地形測量などが行なわれており、その規模は、全長約九二m、前方部幅約二八m、高さ約八m、後円部径約五八m、高さ約八mを計る。発掘調査は実施されていないので、内部主体、副葬品等は不明であるが、古墳の規模、柄鏡形の墳形、立地などから考えて、典型的な前期の大型前方後円墳である。

以上のように、この古墳は、丹後（丹波）地方の古代豪族の勢力や、京都府内の古墳文化を考える上で、欠くことのできない、極めて重要な遺跡である。

なお、昭和四三年には、加悦町の史跡に指定され、保存が図られてきた。